

私を思い出してください。

ルカ 23:32～43

ルカによる福音書は、主イエスの十字架の死の場面において、共に十字架につけられた二人の犯罪人に注目しています。主イエスの十字架を真ん中に、一人は右に、一人は左に、十字架につけられたのです。そしてこの二人が、主イエスに対して正反対の態度を取ったことが語られています。一人は主イエスをののしり、「あなたはキリストではないか。自分と私たちを救え」と言いました。もう一人はそれをたしなめて、「おまえは神をも恐れないのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか。われわれは、自分のしたことの報いを受けているのだからあたりまえだ。だがこの方は、悪いことは何もしなかったのだ。」と言い、主イエスに「イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときは、私を思い出してください。」と言ったのです。

共に十字架につけられた犯罪人の具体的な言葉を記しているのはルカのみです。一人目の犯罪人は「あなたはキリストではないか。自分と私たちを救え」と言ったのです。これは、その前の所で議員たちが「あれは他人を救った。もし、神のキリストで、選ばれた者なら、自分を救ってみろ」と言って主イエスを嘲ったのと、また兵士たちが「ユダヤ人の王なら、自分を救え」と言ったのと同じことです。彼らは、お前がメシア、救い主だと言うなら、先ず自分を救ってみせろ、それができないならお前はメシアでも神に選ばれた者でもユダヤ人の王でもありはしないのだ、「自分と私たちを救え」と言っていますが、主イエスが自分たちを十字架から救ってくれることを期待しているわけでもない。彼は十字架の苦しみと絶望、怒りや不満をそのようにしてぶつけているだけです。しかし彼のこの怒りや不満、八つ当たりしたくなる思いは、私たちも苦しみ悲しみの中で抱くものではないでしょうか。そのように八つ当たり気味に主イエスをののしることが私たちにもあるのではないのでしょうか。

これに対してもう一人の犯罪人の姿は対照的です。彼の言葉は丁寧に読む必要があります。「おまえは神をも恐れないのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか。われわれは、自分のしたことの報いを受けているのだからあたりまえだ。だがこの方は、悪いことは何もしなかったのだ。」v41。彼は、同じ十字架の死刑の苦しみの中で、その苦しみを先ほどの彼とは全く違う仕方で受け止めているのです。「われわれは、自分のしたことの報いを受けているのだからあたりまえだ。」という言葉がそれを表しています。つまり彼は、この苦しみは自分たちの罪の当然の報いだと言っているのです。彼らがどのような罪を犯して十字架の死刑の判決を受けたのかは分かりません。他の福音書では「強盗」となっているものもあります。またローマの支配への抵抗運動の中でテロ行為を行った政治犯ではないか、という見方もあります。そうであれば彼らには罪の意識はありません。それどころか自分は不当な支配に抵抗するという正しいことをして敵に捕えられ殺される犠牲者だ、という思いだったのかもしれませんが。犠牲者的な思考をする人は根本的に自分を罪びとと思いがたいものです。自分は被害者であり、加害者とは思いません。もう一人の犯罪人の不遜な態度はそういう思いの現れかもしれません。しかし二人目の彼は、自分の罪の当然の報いとして今十字架の苦しみを受けている、と言っているのです。彼が見つめているのは、自分の犯した犯罪に対する刑罰を受けているということではありません。彼が今受けていると感じているのは、神の怒り、神による裁きです。「お前は神をも恐れないのか」という言葉がそれを示しています。彼は今、自分が生ける神のみ前に立たされていると感じているのです。神によって、自分のやったことの報いを受けていると感じ、神を恐れているのです。おそらくこの十字架につけられるまで、彼はそんなことは全く感じていなかったらうと思います。もう一人の犯罪人と同じように、自分は罪など犯していないと思い、自分を捕え十字架につけて殺す者たちへの憎しみで満たされていたのだと思うのです。あるいは皆そこそこ悪いことをしているのにたまたま自分にお鉢が回ってきた。なんと自分はついていないんだ悔しがっているのかもしれませんが。ところが今、十字架の上で彼は、神を恐れる思いを抱くようになったので

す。なぜそうなったのか。それを語っているのが、「おまえは神をも恐れないのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか。」という言葉です。彼が神を恐れる思いを抱くようになったのは、「同じ刑罰を受けている」人がいることを知ったことによってです。彼らと、彼らの真ん中で十字架につけられている主イエスが同じ刑罰を受けていることに、彼は衝撃を受けたのです。そのことは41節の「われわれは、自分のしたことの報いを受けているのだからあたりまえだ。だがこの方は、悪いことは何もしなかったのだ。」v41という言葉から分かります。彼ら二人は同じような罪のために十字架につけられているのです。しかし「この方」、主イエスは、悪いことは何もしていない、それなのに我々と同じ十字架の死という刑罰を受けている、そのことに彼は愕然としたのです。人間が定める犯罪や刑罰に関して言えば、自分たちだって十字架につけられるようなことをしたわけではない、と彼は思っていたでしょう。しかし彼が今見つけているのは神の裁きであり、神の罰です。神の罰としての十字架の死刑を、このイエスという方が我々と同じように受けている、そのことに彼は愕然とし、そこに神を恐れる思いが生まれたのです。

この方は何も悪いことをしていない、そのことを彼はどのようにして知ったのでしょうか。主イエスがどのような方か、彼がもともとよく知っていたというわけではないでしょう。おそらく彼はこれまで主イエスに会ったこともなかったのだと思います。しかし今自分と共に十字架につけられている主イエスのお姿を見つめることによって、この方は何も悪いことをしていないということが自ずと分かったのです。そこで決定的な意味を持ったのが、34節の「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」というお言葉だったと思います。十字架につけられつつこのように祈る主イエスに彼は、まことの神の子を見たのです。そしてその罪のないまことの神の子が、自分と同じ十字架の刑罰を受けておられる、その驚くべき事実に触れた時、そこに神への深い恐れが生じたのです。神が本当に生きてここに、自分の目の前におられる、その生ける神と出会う恐れです。その神への恐れの中で彼は、それまでこれっぽっちも考えていなかったこと、自分が、自分の犯した罪の当然の報いとして十字架につけられていること、つまり自分は十字架につけられて死ななければならない罪人であることに気づかされたのです。

そのことに気づいたことはしかし、絶望の内に死ななければならないことを意味してはいませんでした。自分のやったことの報いとして十字架につけられている、その自分と同じ十字架に、何の罪もない神の子である主イエスがついておられる、自分が罪の報いとして受けなければならない苦しみと死を、罪のない神の子と共に引き受け、味わっておられるのです。その事実に触れた彼は、「イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときは、私を思い出してください。」と願うことができたのです。自分は罪に対する当然の報いとして十字架につけられるしかない者であり、救いを願うことなどどうていできない者だけれども、その自分と同じ刑罰を受けて下さっている神の子主イエスに、「私を思い出して下さい」と願うことができる、その一筋の希望の道が自分の前に開かれていることを彼はこの十字架の上で見出したのです。

ところで、「あなたの御国の位にお着きになるときは」というのはどんな時なのでしょう。字だけ読むなら主イエスが神の国に行かれて、その位につかれた時には、ということですが、主イエスが神の国に入る、という言い方は聖書にはありません。むしろ主イエスによって神の国が来た、という方が一般的です。「イエス様が天国に行った時に私のことを思い出して下さい」と言ったことになってしまいます。そしてその後の主イエスの「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」というお言葉も、主イエスが今日彼と一緒に天国に連れて行って下さる、と理解されることになります。しかし、死んだら天国という楽園に行ってそこで幸せになる、というのは聖書の語る福音ではありません。それはつまり主イエスがこの世の終りに神の子としての権威を持ってもう一度来られる、

いわゆる「再臨」のことです。その再臨の主イエスによって最後の審判が行われ、それによって御国、つまり神の国が完成する、主イエスを信じる者たちの最終的な救いが、復活と永遠の命が完成するのです。聖書が語る救いの完成は、死んで天国に行くことではなくて、世の終りに主イエスがもう一度来られることによって完成する御国、神の国にあずかることです。彼はそのことを見つめつつ、とうてい救いに値しない罪深い自分だけども、主イエスが御国の完成のために来られる時に、共に十字架につけられていた自分のことを思い出して下さい、と願っているのです。

主イエスは彼のこの願いを受けて、「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」とおっしゃいました。それはあなたも私と一緒に天国に入ることができる、という約束ではありません。パラダイス「楽園」とはもともと「園」という意味であり、神様に造られた最初の人間アダムとエバが住んでいた「エデンの園」を意味していました。最初の人間はそこで神によって生かされ、守られ、祝福の内に生きていたのです。しかし神様に背く罪によって彼らはその楽園を失い、荒野のようなこの世を生きなければならなくなった、それが創世記3章以降の人間の状況です。ですから「パラダイスにいる」という約束は、罪が赦され、神様のもとでの祝福が回復されることを意味しているのです。そこにおいて決定的に大事なものは、「わたしと一緒に」ということです。パウロはピリピ1章23節で、私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。自分としてはこの世を去ってキリストと共にいたいと熱望している、と語っています。死んで主イエスと共にいる者とされることこそが彼の願いなのです。またテサロニケ第一4章17節では、キリストの再臨によって実現する救いの完成は、「このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。」ことだと語られています。聖書が語る救いは、死んで「天国」という良い所に行くことではなくて、主イエス・キリストと共にいる者とされることです。私はあなたのことをちゃんと覚えている。あなたが十字架につけられて殺される今日、私はあなたと共にいて、あなたの全ての罪の赦しを父である神に祈り、父はその恵みをあなたに与えて下さるのだ、と宣言して下さいました。

主イエスと共に、その右と左に十字架につけられた二人の犯罪人に、こんなにも対照的な違いが生じたことをルカによる福音書は語っています。この二人の姿は、いずれも私達の姿です。自分は十字架につけられるような犯罪人ではない、と言える人はいないでしょう。この二人だって、そうは思っていないのです。正しいことをして、しかし敵に捕えられて殺される犠牲者だと思っているのです。たとえ彼らが政治犯ではなくてただの強盗殺人犯だったとしても同じでしょう。強盗や殺人は確かに悪いことかもしれない、しかし自分がそういうことをしたのはいろいろな理由や事情があったのだ、自分だけが悪いわけではない、そもそもこの世の中が、世間が、自分につらく当たった人たちが悪いんだ、そんなふうにくらでも言い訳はできるのです。私たちもそのように、自分の罪を認めようとせず、いろいろと言い訳をして自分を正当化しながら生きているのではないのでしょうか。そしてその歩みの中で苦しみや悲しみに陥ると、主イエスをののしり、「救い主なら力を発揮して私を救ってみろ」などと悪態をつく、まさにこの一人目の犯罪人と同じことをしているのです。

けれども私たちは、二人目の犯罪人と同じ体験をも与えられるのです。彼は別に、一人目と違って善良だったわけではありません。同じ罪人なのです。そして彼も自分の罪を自覚して反省していたわけではないのです。しかし彼は、罪の結果である十字架の苦しみの中で、自分と同じ十字架にかかっている主イエスに出会ったのです。「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」という主イエスの祈りを聞いたのです。何の罪もないまことの神の子が、自分と一緒に十字架の苦しみと死の淵におられることを知ったのです。それによって彼は神を恐れる思いを与えられました。そのことによって彼は、自分の罪を知ったのです。自分が十字架にかかって死ななければならない罪人である

ことが初めて分かったのです。つまり悔い改めを与えられたのです。そしてそこに、主イエスよ、あなたがもう一度来られ、御国を完成なさる時に、私を思い出して下さい、と願うことができる信仰が与えられたのです。そしてその信仰の告白に対して主イエスが、「あなたは今日わたしと一緒にパラダイスにいる」、あなたは私が実現する罪の赦しの恵みにあずかり、私と共にいる者となるのだ、と救いを宣言して下さいましたのです。私たちが、主イエス・キリストと出会い、神様を知り、自分の罪に気づかされ、そしてその罪の支配からの救いが主イエスの十字架にこそあると示され、主イエスを信じ、その救いを求めるようになり、そして主イエスからの救いにあずかる洗礼を受け、「あなたは私と一緒にいる者だ」という救いの宣言を受ける、そこにおいて、まさにこの二人目の犯罪人に起ったのと同じことが私たちに起っているのではないのでしょうか。この人は特別に立派な人だったから救いにあずかったのではありません。熱心に求めていったから主イエスと出会うことができたのでもありません。自分の罪を悔いて反省する心があったから救われたのでもありません。彼と最初の人との間には、何の違いもないのです。どうしてこのことが彼に起り、最初の人には起こらなかったのか、それは謎です。人間の側に理由はありません。神様の選びとしか言いようがないことです。しかしだからこそ、この二人目の人に起ったことは誰にでも起るのです。既に主イエスを信じる信仰者となった人たちそれぞれに起ったのだし、今この礼拝に集っている私たち一人一人が皆、この出来事へと招かれているのです。